

2025年度漢文夏期集中コース報告

大 竹 弘 子

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは、40週間のレギュラーコースとは独立して漢文夏期集中コース（以下漢文コース）を設置しており、2025年6月20日（金）より7月10日（木）まで実施した。

漢文はレギュラーコースでも、プログラム後期において「選択C」として週1回の授業を実施している。しかし、レギュラーコースには参加できないが、研究上、漢文読解を必要としている大学院生、研究者等が想定されることから、日本人が書いた漢文を中心に、漢文の基本構造習得・読解に集中したコースを設けている。

2 漢文コースの目的と特徴

このコースは、対象として、主に資料として漢文、あるいは訓読文の文章を読むことが必要な歴史学、文学、人類学、宗教研究、美術史等の分野の大学院生、研究者を想定している。漢文読解の必要はあっても、漢文基礎の学習機会が少ないことから、基礎となる構文、旧漢字、漢文訓読体、候文などを集中的に学習し、その構造知識をもとに実際の文章を読み、和製漢文の文体・特徴に慣れ、以後の研究に資することを目的としている。

受講者には次の要件を満たすよう求めている。

1. 漢文読解能力を必要とする専門的または学術的分野への従事を目指していること
2. 上級レベルの日本語能力、および文語文法の知識を有すること
3. 日本語の基礎的文法・文型を十分に理解し、ひらがな、カタカナに加え、漢字約 1000 字以上の読み書きを既に習得していること

3 受講生の構成

今年度は博士課程2名、修士課程修了1名、修士課程2名の5名が受講した。専門分野は、美術史、漢詩、和歌文学、近代史で、研究において、漢文あるいは訓読文で書かれた資料の読解・理解を必要としている。研究対象はある程度固まっているが、読むべき資料は固まっていなかった。また、漢文知識については差があり、既習、ある程度知識がある、知識はないと分かれていた。

4 教育活動の詳細

4-1 今年度の期間・授業時間

今年度は対面授業で一日4コマの構成、期間を三週間とし、月～金曜日午前中に構文の授業、月～木曜日午後に読解の授業を実施した。

4-2 授業の枠組み

4-2-1 時間割・カリキュラム

第一日目、オリエンテーションでは、受講生の専門分野、漢文に関する知識を把握するとともに、このコースで扱う「漢文」とはどのようなものか、漢文訓読の際にはどのような提示法が用いられているかを説明した。

以降の時間割は、50分授業4コマの構成で、うち2コマを午前10時00分から午前11時50分までの間に行い、昼休みを挟んで2コマを午後1時30分から午後3時20分に行なった。

午前の2コマは第二週まで、漢文の構文構造を中心に、単純なものから複雑なものへの積み上げとともに多数の例文を自力で読み解いていく練習を重ねた。今年度は受講生の漢字知識、日本語知識の差がそれほど大きくなく、漢字知識のレベルも高いと判断したことから、構造を説明する例文は単純なものは白文、複雑になるに従って返り点付きで提示した。練習文・課題文は、個々の知識に応じて、白文、または返り点のみ付したものを提示し、複雑な構文は一部を白文、その他は返り点のみ、あるいは返り点・送り仮名付きを用いた。例年に比して白文の割合を高くすることで、説明例文で得た知識を応用していく力を付けることを目指した。

午後の2コマはまとまった文章の読解を行った。第一週目は近代の漢文訓読体の文章を取り上げ、そのスタイルや旧漢字、旧仮名遣いに慣れることを目指した。二週目以降は、まず『論語』等の中国古典、次いで『日本外史』等の和製漢文からまとまった内容のある短い文章を選び、返り点、送り仮名を付けた形で提示した。授業では、まず著者、題名、歴史的背景などの情報を共有してから、午前の授業で得た構文の知識を活用し、辞書を駆使して、各自自力で読解を試みる。ある程度進んだところで、クラス全体で読み方と意味を確認し、重要な語彙・表現を指摘して覚えるよう促した。同時に、内容の理解に必要な背景知識を得る手段、様々なリソースについても情報を共有した。

第三週午前は「候文」を扱い、実際の候文による近世資料の読解も行った。第三週後半は、一次史料読解の経験として、また、様々な文体・内容の漢文に触れておくことを目指し、受講生の選んだ研究資料から一部分を選び、全員で読解を試みた。取り上げたのは、一条兼良『新統古今和歌集』真名序 1439年、林鶯峰『本朝画史』序 1691年、加藤景孝「詩絵説」総論 1872年 井上哲次郎『新體詩抄』序 1882年、臺灣總督府公文類纂より「在留

外国人戸口調査ノ件」1898年である。

4-2-2 電子辞書の活用

「漢字辞典・国語辞典に関する指導・情報検索方法の指導」の必要性に鑑み、電子辞書を持たない受講生に電子辞書を貸与し、使用法を指導しつつ辞書情報に対する知識を得させた。また、授業内でも、「今必要な情報を得るためどの辞書を引くか、情報を得るためにどのような検索方法があるか」について意識させ、どのように調べれば求めている情報にたどり着けるか判断できるよう指導した。受講生が実際にアクセスできる辞書等は形式・用語など様々で、それぞれの辞書から得られる情報を整理し用語に慣れるためである。具体的には、

- ① 漢字の基本情報にはどのようなものが提示されているか
- ② 字義はどのような階層性をもって並べられているか
- ③ 助字・句法・語法・日本語固有の使用法について、どこにどのような項目として提示されているか
- ④ 漢字辞典と国語辞典の提示情報の違いを理解し、求める情報はどちらにあるか
- ⑤ 辞書を対照しながら目的の情報を求め、確認していく手順
- ⑥ 漢字辞典・国語辞典で求める情報が得られない場合、どう情報を求めるか

以上の点を中心に、全員で同じ漢字・語彙を調べながら確認させた。

4-2-3 教材配布

教材はハードコピーの形で当日受講生に配布し、授業を受けながら書き込んでいく形式を取った。その上で授業後の復習・課題を行うためGoogleドライブによる教材シェアを行った。

4-2-4 個人ノート

受講生の構文・読解のプロセスを共有するためGoogleドキュメントの形で受講生の個人ノートを設定して講師と共有し、授業中の個々の読み、また、課題とした練習文読み下しを書き込むこととした。授業中には講師がそれぞれの誤りをその場で指摘し、課題の場合は次の授業までに誤りが指摘された。受講生はそれぞれ指摘を見て訂正した。具体的には、受講生一人一人が自分のドキュメントファイルに読み下しなどを書き込む、講師は受講生の書き込んでいく内容を見て訂正すべき部分を直接、あるいはドキュメント上で赤字・コメントなど書き入れ指摘する、受講生は指摘された誤りを自分で訂正してみるという流れである。

5 受講生のコースに対する評価・意見

コース終了時に受講生に対しGoogleフォームによるアンケートを行い、回答を得た。コース全体に対する評価はおおむね高かったが、カリキュラム・課題に関する意見があった。講師側としては三週間という短期プログラムの中で、できるだけ広範囲に資料を読むための基礎知識を習得してほしいと考えるので、一つ一つの項目にかける時間は短くなるが、受講者によっては自分が習得を目指す項目については質量ともにやや物足りないと感じていたようである。例を挙げると自分で返り点を付けてみる練習をしたいという声があった。白文を読むということは返り点を正しくつける練習になっているが、明示的にそれを示したわけではない。課題提出を、返り点を付けたうえで読み下しを書くという形にすることが考えられる。一方で、課題をドキュメントファイルに記入する際、ひらがな・カタカナでの記入に時間がかかるという意見があった。慣れない方式で「書き込むこと」が負担になっていることが窺える。このプログラムは集中コースということで時間的余裕が少なく内容も密であるため、新たな方式・課題を加えていく余裕はあまりないが、「構文・読解」の双方でより明示的に課題が「何を求め、何を確認しているか」を示す必要があるだろう。

6 おわりに

本コースでは「受講生の知識・理解に応じて、課題を調整し、個別に指導する」ことを目指し、語彙力、漢字力、日本語力の個々の差を踏まえながら調整を行っている。今年度は課題の質量ともに例年を超えるレベルを求めたが、受講者全員が熱心に取り組み、全ての課題をこなした。来年度以降も受講生からの意見を踏まえつつ、可能な工夫を探っていきたい。また、アンケートには受講者が学習成果を実感し、これからも資料に取り組む意欲が表れており、本コースの成果と受け止めている。

(おおたけ ひろこ／2025 年度漢文夏期集中コース主任)